川端康成全集　第四巻

川端康成全集

第四巻

花のワルツ

新潮社

川端康成全集第四卷

花のワルツ

昭和四十四年十二月二十五日　發行
昭和四十九年　六月三十日　三刷

定價　二千三百圓

著者　川端康成
發行者　佐藤亮一
印刷者　塚田重
印刷所　塚田印刷株式會社
原色版　半七寫眞工業株式會社
製本所　新宿・加藤製本所
東京都新宿區矢來町七一
發行所　株式會社　新潮社
電話東京(〇三)二六〇—一一一一
〒一六二　振替東京八〇八番

亂丁本、落丁本は本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

© Hideko Kawabata Printed in Japan 1969

第四卷

目次

田舎芝居……七
童謡……二三
イタリアの歌……五七
これを見し時……七五
花のワルツ……九五

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

父母……一八三
夕映少女……二〇五
生花……二二七
金塊……二四五
百日堂先生……二五九

高原……二七七
故人の園……三五七
正月三ケ日……三七七

花のワルツ

田舍芝居

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

文吉が警察へ來て言ふには、文吉の弟竹三郎は島田里子方へ入婿中、自分の不始末から方々へ借金を作つて、首が廻らぬやうになり、里子の姉花の嫁入先きへ泣きついて來たので、花は緣者のよしみもあり、立て替へてやつた金が四千圓にも上つてゐるのに、竹三郎は一昨年家出したつきり音沙汰がない。ところが花にしてみれば、その金は夫に內證に融通したものだから、この際弟竹三郎に代つて文吉が半金でも入れておいてくれないと、花の離緣騷ぎが起るかもしれない。竹三郎から花へ宛てた借用證文を示しての嚴談である。その證文はいかにも竹三郎の自筆である。實印も押してある。文吉は弟の借金を拂はねばならぬものであらうか。拂ふにしても、一應弟に確かめてみたい。またそんな風では、行くさきざきでどんなふしだらをしてゐるかしれたものでないから、竹三郎の行方を搜して貰ひたい。

その時ちやうど竹三郎の村の駐在所の巡査が警察に來合はしてゐて、文吉のいふことにふと疑ひを持つた。これが犯罪を嗅ぎつける第六感となつた。

花は勘助の長女である。もとは、勘助、妻しな、長女花、次女里子、三女みち、長男作治の六人暮しであつたが、花の嫁入後に、父の勘助、妹のみち、弟の作治は相次いで死亡した。そのうちみちは變死であつた。都の青年を戀ひこがれて、海に投じたといふと、物語的であるけれども、少し狂つてゐたといふ噂もある。また少しぐらゐ高い巖頭から飛び込んだところで、溺れたとは不思議だといふ

話もある。姉の花や里子も海女(あま)であつた。海女といつても特殊の存在ではなく、ここらあたりの漁村の若い女達はたいてい海に潜るのである。しかし花や里子は宿屋に出向いて、遊覽客の好奇心を滿たした。この娘達の働きで、父の勘助は一財産作つたと言はれてゐる。花などは生れつきのいたづら娘で、村の若者達と不品行を重ねた果てであつたから、彼女の方でも樂しみとしたくらゐだが、末娘のみちは餘りに早く姉達を見習はせられたので、死ぬやうなことになつたのかもしれない。みちはとにかく、一人息子の作治も死んだので、里子に養子を迎へ、それが自然後取のやうな形となつた。花は近くの町の海產物商村井敬吉に嫁いでゐた。ところがやがて家を飛び出して沃度(ヨード)會社の坂口と世帶を持つた。

村井の家にゐる頃とちがつて、薄給の坂口の女房の花が、四千圓といふ大金を立て替へたといふことが、第一信じられないと、巡査は考へたのだつた。坂口は沃度の原料となる海草を買ひ集めに、村村を歩くのが仕事の男だつた。花がありもしない金を妹婿のために工面するくらゐならば、實家の妹、つまり竹三郎の女房の里子に出させさうなものである。それに狹い村のことであるから、たとへ小口をかきあつめたにしろ、竹三郎がそれ程莫大な借金をしたのであれば、隱しおほせる筈はなく、村人の口の端に上りさうなものである。ところが駐在所の巡査はそのやうな噂を耳にしたことがない。怪しいと思つて、警察からの歸り路に島田里子方へ立ち寄つてみると、里子も竹三郎の借用證書のことは知つてゐると答へた。そればかりでなく、竹三郎は里子の母しなの印鑑を盜用して、まだほかにも借金してゐたが、その發覺を恐れて二年前家出したのだと、里子は夫の惡口を言つた。自分はしばらく他國で働いて量見を入れ直して來るつもりだから、先日買約した金盞花は皆破約にしてくれといふ手紙が、家出後間もなく竹三郎から屆いたと、それを巡査に見せた。それと同じ頃、竹三郎の實父のところにも、島田家に對して養子にあるまじいことをしたから、滿洲へでも行つて、身を立ててから

詫びを入れるといふ手紙が來てゐた。

巡査の疑ひは大方薄れたが、とにかく手紙を駐在所へ持つて歸つた。二通とも淺草の消印であつた。東京へ出たものとすると、滿洲行きなどは口實に過ぎないにしろ、竹三郎の行方を搜すことは全く困難であるかもしれないと思はれた。花は四千圓の取立てを裁判沙汰にしたわけでなし、巡査は深く氣にも止めなかつたが、二三日して竹三郎が海軍の在鄕軍人であることを思ひ出したので、簡閲點呼がどうなつてゐるか、役場へ行つたついでに調べると、淺草東仲町の飯田屋旅館から、點呼に不參するからよろしく賴むといふ手紙を、竹三郎は役場の兵事係に寄越してゐた。しかしこの手紙は前の二通の手紙から半年ばかり後の日附である。實父や里子に宛てた前の手紙には、住所が書いてなかつたが、やはり消印は淺草であつたところをみると竹三郎は半年も飯田屋旅館に泊つてゐたのであらうか。木賃宿ならばありさうなことだけれど、東仲町あたりには木賃宿はないはずである。それなら飯田屋旅館に奉公してゐるのであらうか。いづれにしろ、不義理の借金で行方をくらましてゐる竹三郎が、たとへ假りの宿にしろ居所を明記してゐるのは變である。

點呼に不參の報せだから尙變である。村役場へ居所が知れれば、當然里子等の耳にも入るはずで、その時里子はどうしたかと、巡査が聞いてみると、兵事係は吐き出すやうに、あんな薄情な女はない、こちらは親切のつもりもあつて、直ぐに竹三郎からかういふ手紙が來たと報せてやつたのに、里子はいらぬおせつかいだとばかり、あんな男はどこにゐようと知つたことではないといふ風であつたと答へた。それが餘りに冷淡な素振りなので、里子は竹三郎の行方を知つてゐながら、わざと白つぱくれてゐるのかと、兵事係は疑つたさうである。また兵事係の話によると、役場へ手紙が屆いてから四五日後に、竹三郎は東京驛から實父に二十圓送つて來たさうである。

これを聞いて巡査はむつと腹を立てた。二三日前に行つた時、實父はその金のことを巡査に隱して

ゐた。息子の前の手紙だけしか巡査に見せなかつた。それはありさうなことである。爺さんが隠し立てした氣持は分る。竹三郎の方も役場へ居所を報せたので、これはしまつたと氣がついて、東京驛からどこかへ逃げたか、または高飛びするつもりなので、恐れるところなく宿屋の名を書いたのか、いづれにしても辻褄が合ふ。さういふ旅立ちの悲しさから、古里の老父を思ひ出して、二十圓送つたのだらう。しかし巡査はとにかく耄碌爺に騙されたやうな氣がするので、役場を出て巡廻の道すがら寄つて見ると、爺さんは竹三郎から二十圓受け取つたことは直ぐに白狀して、その爲替を封入して來た手紙も見せたが、しばらく巡査の顏色をうかがつてから、いかにも口惜しさうに、その金は手に入つた翌々日、花が强奪して行つたと訴へた。町にゐる花にどうして金のことがそんなに早く知れたかと、巡査が不審がると、花は郵便局で聞いて來たさうだと、爺さんは答へた。竹三郎は花の實家へ入婿して、さんざん金の迷惑をかけたばかりでなく、花にまで千圓近い借金をしてゐるのに、それをおいて、實父に仕送りするとはけしからん、その金は當然こちらのものだから、よこさなければ訴へるといふのが、花の言ひ分だつた。千圓？　確かに花は千圓と言つたかと、巡査は思はず大きな聲を出したので、爺さんは自分が叱られてゐるものと勘ちがひして、息子がそんな大金を借りるはずがない、また花がそんな大金を貸せるはずがないと、しきりに辯解した。

花に宛てた竹三郎の借用證書は四千圓である。爺さんの記憶にまちがひがないとすると、千圓がどうして四千圓になつたのか、證書は僞造ではないかといふ疑ひが、またしても巡査の頭に持ち上つた。尙爺さんの話によると、花はその時傳藏を連れて爺さんの家へ來たさうである。傳藏は前に雜貨の行商をしてゐた男で、行くさきざきの村で評判が惡くなればなるほど、女との噂の種を撒いて歩いたが、今では沃度會社に取り入つて、出入商人のやうな風になり、町に落ちついてゐた。さういふ彼が花と連れ立つて來たとなると、二人の間になにかあると思ふのは、警察官でなくとも推察されることだつ

た。娘の頃から姉妹負けず劣らず身持ちが惡かつたが、花は妹の里子ほど美人でないためにか、さういふことにも放れ業を演じて、いつも花の噂が妹をかばふやうな、一種の力といへば力があつたくらゐだ。

それはまだ花が娘の頃、十年も前のことで、今の駐在所の巡査は噂に聞くばかりであるけれども、村の若者が花の家の塀よりも高いさぼてんの傍の裏木戸をあけることにも慣れて、安心し切つてゐると、その夜に限つて花は表に飛び出し、大きな聲で騒ぎ立てて、金を出させる手段にしたといふ。その手にかかつた男が少くないといふ。巡査はそんな古いことまで思ひ出して、磯臭い濱を歩いて歸ると、海女小屋の前で海女達が焚火をしてゐた。珍らしい烏の大群がその近くに騒いでゐた。夕燒であつた。春の潮風が少し冷たいからといふのではないが、巡査はなんとなく焚火に近づいて行くと、海女達は話を止めて、あぐらを組んでゐた者は立ち上つたりした。皆手拭をかぶつて、赤い褌をしめてゐた。體を溫めて歸らうとしてゐるところなので白布の上衣をひつかけた。巡査はただなんとなく、花や里子のことを聞かうとしたけれども、答へる者はなかつた。その大きい岩から花の妹のみちが身投げしたのだと言はれて、巡査はその岩に登つてみた。みちの死體は近くに浮んでゐたものの、飛び込むところを見た者は誰もゐないのだから、その岩とはつきり指せるわけはないのだが、その岩があたり一面の岩礁のうちで最も高く、その岩の下で海水が最も恐ろしく渦卷いてゐるので、その岩だといふ傳說になつたのだらう。巡査が登つて行くと、烏の群は彼のまはりを飛び立つて騒ぎ、しかも逃げ去るでもないのは、いやな氣持であつた。海村に住み慣れて、日頃海や岩など改まつて眺める折のない巡査は、荒々しく岩の根を嚙み、しぶきを立てて渦卷いてゐる波が珍らしく、暮色はその凄いありさまに鬼氣を添へて、身が縮むやうだつた。そこそこに岩を逃げ下りると、岩の壁に取りかこまれた焚火の傍に戻つて、なるほど海女でも死にさうな場所だと言つた。しかし逞しく胸を張つた裸の女

達は、あれくらゐの淵で死ぬものかと笑つた。みちの姉の花はこの濱でも特に働きのいい海女で、新聞社が寫眞を取りに來たりすると、妹の里子といつしよに、わざと前へ出て寫させ、畫家のモデルになつたこともあるといふ話だつた。夕空の方に向つて、巡査は海女達と連れ立つて、岩傳ひに歸つて行つた。その途中、里子には竹三郎の前に民雄といふ婿があり、民雄も東京へ働きに行つたきり音沙汰がないといふことを巡査は聞いた。民雄がゐなくなつた時は、あの浮氣者がと不思議なくらゐ、里子は悲しみ嘆いて、それ以來人が變つてしまつたさうである。その時里子はまだ二十そこそこで、近村にまで聞えた美人であつたさうである。

駐在所に歸つて、竹三郎の手紙をポケツトから出した途端、巡査の頭に閃めいたのは、その用箋であつた。前に女房の里子と實父とに出したもの、後に役場と實父とに出したもの、四通とも同じ日本紙の十行罫紙である。田舍ならばとにかく、東京の宿屋や停車場で、日本紙の罫紙を手紙に用ふことは先づ珍らしい。また「東京驛にて」と封筒の裏に書いた送金狀の文字は、驛の郵便局の窓口に備付けの筆墨で立ちながら書いたと思はれないところがある。しかしそれは後から氣がついたことで、その時巡査の頭に閃めいたのは、竹三郎の手紙と同じ罫紙が、駐在所にもあるといふことであつた。それは二三年前傳藏がこの村へ行商に來た時に、なにかで駐在所へ十帖ばかりくれて行つた罫紙である。竹三郎もそれを買つて、家出する時に携へぬとも限らぬが、それを半年も持つてゐるのは少しをかしいし、東京で全く同じものを買ふといふのも少し變である。特に傳藏が花に伴はれて、竹三郎の手紙が着くと直ぐ爲替の金を强奪に來たといふのは、尙更巡査の疑ひを深めて、竹三郎の四通の手紙も借金證文も悉く僞筆ではないか。手紙が僞筆だとすると、巡査の疑ひは當然の飛躍をして、竹三郎は殺害されたのかもしれない。何者かが竹三郎はまだ生きてゐるやうに見せかけようとして、僞筆の通信をしてゐるのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com